

知らなかった
ユダヤ民族の歴史あれこれ④
パウロ 乾 寿夫

ユダヤ教徒は共同体の指導原理をめぐって生じた階級的思想的対立の中から諸党派が結成された。聖書にもしばしば出てくる諸党派を少し詳しく、その主張とたどった歴史を見てみたい。

サドカイ派

支配者が変わるたびに、共同体の指導階級は再編成された。その際に最も問題となった地位は、エルサレム神殿の大祭司職であった。ハスモン王朝の成立と同時に、それまで地方祭司であったハスモン家が祭司職を掌握した。

ダビデは新都エルサレムに宮廷を構え、カナン都市国家のエジプト型組織をモデルとして、高度に発達した行政組織を整えた。その閣僚に祭司職があり、ツアドクが任命された。このツアドクの子孫であると称する一家が大祭司職を世襲し、神殿を中心とする神政共同体の寡頭政治体制の担い手であった。サドカイ派はこのツアドク家の祭司を中核とする上級祭司と貴族、商人など富裕階級が、BC2世紀初頭に結成した党派に始まる。この社会階層的背景がサドカイ派の思想と信条を決定した。彼らは神殿の犠牲祭儀を最も重要な宗教

行為と考え、律法解釈については保守的であり、常に権力志向的であった。「モーセの律法」のみに権威を認め、以後生じた変化に応じて発達してきた「口伝律法」の拘束力を拒否した。律法に書かれていることしか信じない立場から、彼らは天使や悪霊の存在、霊魂の不滅、肉体の復活など、来世信仰を否定し、また現状維持を目指す基本姿勢のゆえに、終末の到来を期待する黙示的諸宗派の思想とメシア待望に対して冷淡であった。共同体内の自分たちの権力の維持を第一の目的としたサドカイ派は共同体の自治権が侵害されない限り、外国人支配者と妥協した。共同体の自治会議(サンヘドリン)においても、常に政治的グループを形成して、共同体の指導権の掌握に努めたが、宗教的事柄に関しては、民衆の圧倒的支持を受けていた。パリサイ派の意見を無視することはできなかった。ローマ人支配者に対して、本来サドカイ派は協調的で、ローマ人に対して反乱を起こそうとする民衆を宥め、不穏な動きを自己規整することに努めて、支配当局との摩擦を極力避けた。しかし大反乱が勃発し、エルサレム神殿の滅亡によって大反乱が終結すると、サドカイ派は消滅した。

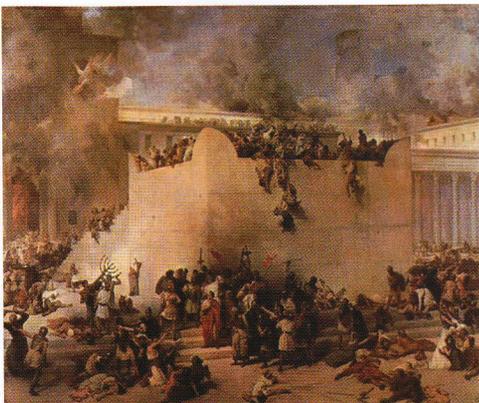
パリサイ(ファリサイ)派

バビロニア捕囚を通じて、神殿の祭儀を失ったユダヤ人は、民衆共同体

の基盤を律法(トーラー)に求めた。この時以来、律法を研究する平信徒の権威は祭司の権威と拮抗するようになった。共同体の司法問題を取り扱い、会堂(シナゴーク)において口伝律法の解釈と発展にたずさわったパリサイ派の律法学者たちは、民衆の間に大きな権威と影響力をもつようになった。サウロと名のついていた青年時代の聖パウロも、パリサイ派の仲間に加わってイエスの弟子達を激しく迫害していた。ダマスコで幻のイエスに出会って回心するAC35年頃まではパリサイ派で熱心に律法を学び、エルサレムで民衆から尊敬されていた律法学者ガマリエルに師事して律法学者を目指していた。ハスモン王朝の領土拡大戦争とヘレニスト的強大な王権の確立に対して、パリサイ派は批判的になっていった。彼らが特に我慢できなかったのは、ハスモン家の王が世俗的支配権とともに、宗教的権威を掌握していることであった。ヤンナイ王が死に、妻アレクサンドラはBC76年に女王の位につくと、民衆の真の指導者であるパリサイ派と和解することとは、国内に平和を確立するために絶対必要であると考え、エジプトに追放亡命していたパリサイ派の指導者シメオン・ベン・シエタハを呼び戻して、議会の議長に任命した。彼が定めた法規の中で、その後のユダヤ人共同体の発展に最も大きな影響

を及ぼしたものは「義務教育制度」であった。それまで子供の教育は両親の責任であったが、各地に学校を建てて、子供を学校に送ることを両親に義務づけた。これは教育が民族の基礎であるというパリサイ派の主張の制度化であった。

ローマ帝国の支配に対する民衆の抵抗運動が目増しに激しくなっていく時代にはパリサイ派の指導者たちは破局的対決を回避しようと努めたが、熱心党の指導の下に燃え上がった民衆の熱狂的好戦主義を静めることはできなかった。しかし、大反乱が第一次、第二次ユダヤ戦争に拡大し、エルサレムの悲劇的破壊によって終結したのちに、焦土の中からユダヤ民族宗教共同体を再建したのは、ヤブネに集まったパリサイ派の賢者たちであった。



エルサレム神殿の破壊
(フランチェスコ・アイエツ画 1867年)